

---

# 暑中見舞いの雪だるま

伊勢

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

暑中見舞いの雪だるま

### 【コード】

N3205B

### 【作者名】

伊勢

### 【あらすじ】

暑中見舞いに届いた雪だるまが、真夏の東京に涼やかな風を運んでくれた。僕と彼女と僕達の夢。全部を繋ぐ雪だるまホットライン、な話。

(前書き)

3 / 1 2 ちよつと改訂してみました。

暑中見舞いの雪だるま

握り締めていた i - pot がするりと手からこぼれ落ち、繋がっていたイヤホンも耳から抜けた。

今まで僕を包んでいた心地好い桑田佳祐の歌が消え、代わりに電車が終点へ到着したことを告げるアナウンスが流れた。

どうやら眠ってしまっていたようだ。床に落ちた i - pot を拾い、フード付きのダウンを着込んでプラットホームに降り立つ。

外は真つ白な世界だった。

息までも白く染まる冷たく張り詰めた空気。屋根のないプラットホームには雪の絨毯じゅうたんが敷かれ、西に傾いた太陽の光を浴びてきらきらと輝いている。

寒さと眩しさに眠気など一瞬で消し飛んでしまった。

「けーすけっ！」

改札を出たところで、横から高く澄んだ声が聞こえた。

振り向くと、白い世界よりもっと白いコートに身を包んだ美雪みゆきが、こちらに駆け寄って来るところだった。

「思ったより到着早かったじゃん！ 遅刻癖、治ったみたいだね」

昔となにも変わらない笑顔で、やっぱり白い息を吐きながら少し皮肉気味に美雪は言った。

「ああ、お陰様でな」

僕も軽い調子で返す。

「ふーん、どーだか。んで、五年ぶりに会った愛しの彼女に何か言うことは？」

「ん、久しぶり」

「な……それだけ？」

膨れっ面が少し可愛いと思った。

「いい天気ですね。あなたに会えて嬉しいです」

「社交辞令か！」

「あーあーあー、寂しかったよ。とーっても会いたかったです」

「なにそのちよっと投げ遣りな態度！」

なかなか小気味良いツツコミだ。

このままボケ続けても面白いけど、美雪の右手こぶしが上がりかけているのが分かったので、僕はウソウソ、と付け加えてから言った。

「ただいま……だ、美雪」

ついでにお土産代りの白い箱を美雪に渡してやると、とたんに彼女の顔は明るくなった。

「おかえり、啓介！ それと……オメデトだね！」

人と物が溢れるだけの東京の町から、津軽海峡を越えて五年ぶりに帰ってきた故郷の北海道は、とても寒いけれど、なんだかとても暖かかった。

『暑中見舞いの雪だるま』

ピンポン、ピンポン、ピンポン、ピンポン、ピンポン、ピンポン、ピンポン！

「けーすーけー！ おーきーろー！」

積雪がいまいちだったその年に、初めて本格的に雪の積もった冬休み最初の日。美雪が朝っぱらから人ん家のインターホンを連打しまくって僕を呼んでいた。

「うつさい！ 何？」

ピンポンコールの大合唱の前にやむなく起こされた僕は、仕方なく玄関のドアを開けてやる。

そんな僕を、長い髪を二つに結んで白い耳あてをした美雪の満面の笑みが待っていた。

「おっはよ！ 雪だるまつくろ！ それも特大のヤツ」

美雪の誘いはいつも唐突で突飛だ。夏にも、いきなり深夜に自転車に乗ってやってきたかと思ったら、『海行くよ！』なんて言っただけ。そのまま日本海まで夜通し走らされたことがあった。まあその時見た日の出は、確かに最高だったけど。

「お前なあ、こんな朝から来たかと思えば雪だるまだあ？ 年いくつだっつーの」

「無事十七になりました。いくつになっても童心を忘れない、あた

しって偉いね！」

「一ミクロンも偉くねえっ！」

「まあまあ、折角雪が積もったんだからやらなきゃ損だって。雪があたしらを待つてるよ？」

確実に待つてないから！　なんてツツコミをしたかったけれど、結局悪怖れもしない美雪のペースに飲み込まれるいつものパターンで、僕は近くの公園まで連れていかれるハメになった。

「うっわあー！」

公園では、昨夜降った雪がブランコや滑り台に被さり、僕の膝くらの高さまで積もっていた。まだ誰の足踏もついていないまっさらな雪に美雪が一步を踏み出すと、シャリっという気持ちの良い音がする。それが気に入ったのか、美雪はそのあとしばらく走り回り、公園中にその小さな足跡を残して回った。

「ったく、ホントにガキだなお前」

「いくつになっても童心を忘れな……」

「はいはい、分かった分かった」

また同じやり取りが始まりそうだったので、僕は美雪の言葉を遮って本題へと話しを変える。

「で、雪だるまだっけ？　作るんなら早く作ろーぜ。寒いから早く帰りたいんだよね」

「あーそうそう、雪だるま！　うん、じゃ、早速作ろっか？」

今度は滑り台に登ろうとしていた美雪は、今思い出したかのよう

に相づちを打った。

「啓介はおつきい方お願いね！ あたしは顔のほうだけ作るから」「なにその理不尽!？」

『だけ』の部分が強調されていた。

どーせそう来るだろうとは思っていたけど。

もちろん雪だるまを作るのは今回が初めてじゃない。小さい頃は町に雪が積もる度にこの公園で、美雪と二人でよく雪玉を転がしたものだ。と言っても作っていたのはほとんど僕一人だったけど。はりきりすぎて何十体も作って、夜になってお袋が探しに来たこともあったくらいだ。

でも、そういえばここ何年かは作っていないかた気がする。それどころか、美雪と雪で遊ぶのだったて久しぶりだった。

そうだな、こうなったら飛び切りでかいのを作ってやろうじゃないか。そう思ったら、なんだか雪だるま作りにやる気が出てきた僕だった。

積もったばかりの雪はやわらかく、ドッチボールくらいの雪玉は、手近な雪を集めるだけで簡単に作れた。問題はここからだ。

ただ玉を転がすだけでは綺麗な球体は作れない。フットボールのような楕円形で不格好な雪だるまになってしまう。ある程度転がしたら、転がす方向を変えて満遍なく雪を付着させるのがポイントだ。

この作業がなかなか手間を喰う。雪玉が小さいうちは方向変換も簡単に行えるが、今回みたいに大きいのを作ろうと思ったら玉は転がすと言うより、押したほうが良く動く。縦にずっと転がしている分には楽でも、一度方向を変えると玉はなかなか思うように動かない。

こうなったら後は力作業で、ひたすら自分の体力を削って玉を大きくしていくことになる。

この不毛な作業を三十分ほど続けていると、雪だるまの胴体は、直径七十センチ程の球体まで成長していた。さすがに一人で転がすのはしんどくなり始める大きさだ。

ふうっ、と一息ついたところで、頭の負担をこなしているはずの美雪の様子を盗み見てみた。

美雪はかなり頑張っていたようで、着ていた上着を脱いで、それでも汗をかいて、せっせと作業を続けていた。

「へえ、結構頑張ってるじゃん」

「まあねえ、気合入ってますから！」

「ふうん。どれ、どんくらいの頭作ってる……げ!？」

美雪の作っていた雪玉は、それはそれは小さなものだった。

「ちっちゃ！ なにこれおにぎり？ お前三十分やっててこんだけしかできてねえのかよ？」

「し、失礼な！ 一生懸命やった結果だよ！」

美雪が赤い顔をして抗議するが、その大きさはどう頑張っても十センチかそこらで形もいびつだった。

「どうしても丸くできなかつたんだもん」

見れば美雪の周りには幾つもの雪の塊が落ちていた。そういえばコイツめちゃくちゃ不器用だったっけ。何個も玉を作ろうとして失敗したのが分かった。

「アホ、いつつ俺にばっかに作らしてたからそういうことになるんだよ。もういいからこっち手伝えよ」

美雪はかなり悔しそうだったけど、渋々僕の言葉に従った。

二人での雪玉転しは思いのほかはかどった。もともと不器用なだけで運動はできる美雪が加わったことで、雪玉は面白いように転がって、見る見るうちに大きくなった。

せーの、という美雪の掛け声で雪玉を押す僕らは、運動会の大玉転がしに夢中になる小学生と大差ないはしゃぎ様だったかもしれない。

雪玉が転がった真っ直ぐな跡の上に、さらに二つの足跡が残っていく。いつも指示だけで僕に任せきりだった美雪と、初めて意味のある共同作業をした証は、僕のやる気をさらに高めてくれた。心なしか美雪も嬉しそうだったし。

そんなことが影響してか、太陽が空のてっぺんに昇る前に、雪だるまは完成した。それも僕が思っていたよりずっと早く、ずっと大きいものが。

遅れていた頭の方も、胴体と同じくらいの大きさのものがすぐに完成して、『よいしょ』と苦労しながら持ち上げて胴体とドッキングさせた。

腕には落ちていた木の枝を使い、美雪の赤い手袋を引っ掛けてある。

目は適当に石ころを押し込み、口には美雪持参の人参を埋め込んだ。

僕のマフラーを巻いてやると、彼はなかなか愛らしい表情になった。

「うん、上出来！」

完成した身長一・八メートル程のスノーマンを見見上げながら、美雪が満足気な声で言った。

その表情を見て僕も何とも言えない満足感に包まれた。ああ、この顔を見るためにいつも僕は頑張っちゃうんだ、そう思ってしまうくらいに。

そんな僕たちを微笑ましく思ったのか、生まれたばかりの雪だるまは、にっこりと笑っているように見えた。

美雪の機嫌が傾いたのは、それから僕が帰りの提案をした時だった。

「お疲れさん。そんじゃ帰りますか」

一仕事終わった後はゆっくり風呂にでも入りたい気分だった。

「へ、もう?」

「はあ? 雪だるま作ったんだからもう満足だろ?」

美雪の予想外の反論に語尾が少し荒くなってしまった。

「だって、あたしが啓介と遊べるのコレが最後かもしれないんだよ?」

急に沈んだ声になった美雪が言った。

「なにそれ」

「だって啓介……もうすぐ東京行っちゃうんでしょ?」

言葉につまる。

「知ってた、のか？」

「伯母さんに聞いた……」

「そか、やっぱり話さなきゃダメだよな」

僕は近いうちに東京に旅立つことになっていた。

医者だったオヤジの影響で、たくさんの患者から感謝されるその背中を見て育った僕は、自然とその道に進むことが夢になっていた。生まれた土地を遠く離れるのは、北海道を出た事もない僕にとってかなり不安が付きまとう決断だったけれど、設備のいい東京の大学なら医師免許も早くに取れる、と言うオヤジの勧めもあって東京行きを決めた。

心残りだったのは一つ年下の美雪のこと。赤ん坊くらいの頃からいつもいつも引つ張り回されてきたけれど、ずっと一緒だった大切な女。

何気なしに付き合ってきた彼女に、いきなり東京に行きます、なんてあんまり言いずらくて、結局今日まで言い渋ってきた。でもどうやらお袋がバラしてくれちゃっていたみたいだ。

「俺、やっぱり行くって決めたよ。夢への近道があるんなら、その道を行きたいって思うんだ」

意を決して自分の考えを伝えた。

「何で？ 何でそんなに焦るの？」

僕らを見つめる雪だるまが、少し悲しげな顔になったように見えた。

「この町に医者はオヤジ一人しかいない。お袋も手伝わっちゃいるけど、それでも限界がきてる。うちのばあちゃんが病気になったとき

だって、オヤジは手が回せなかった。医者が、必要なんだ」

一気に言った。過疎地の小さな町の医者事情は深刻だ。親が医者である僕だからこそ、その状況が良く分かる。

「使命感、なんて大袈裟なものじゃないけど、俺のしなきゃいけないことだと思ってる」

美雪は唇を噛んで、なにかをこらえているような顔をした。

「……重いよ。そんなこと言われたら、引き止めるなんてできないじゃん」

「美雪……」

「行けば？ 可愛い彼女に浮気されてもいいんならね！」

その言葉はどこか強がっているように聞こえた。ずっと悩んでいたのかもしれない。けれども僕は、それに甘えてしまうことにした。

「俺よりいい男なんていねえって」

「わかんないよ？若さゆえの過ちってよく言っし」

「自覚あんなら過らないでくれ！」

張り詰めていた空気が少し和む。シャア少佐に救われた。

帰り道、まだ少し浮かない顔をした美雪を宥めようと、近くの『松屋』という駄菓子屋によった。

「ほら、なんでも好きなの買ってやるから選べって」「ご機嫌取りのつもり？」

文句をいいながらも美雪は五本ほどアイスを鷲掴みにしカウンタ―に持っていった。ちよつと財布に不安が残る量だった。

「あら美雪ちゃん、久しぶり。こんな寒い日にアイスなんて元気ね」

顔なじみの松屋のおかみさんが、人懐っこい笑顔で美雪に話し掛けてきた。

「はい！ さつきだつてその公園でおつきな雪だるま作つてきましたから」

あの不機嫌はどこに言ったのか、急に元気になつた美雪はにっこりとそう答えた。

「雪だるま？ へえ、どのくらいの大ききさなんだい？」

「啓介と同じくらいです！」

「俺はそこまででかくねえつて！」

確かに人よりは高い僕だけど、百八十センチにはまだまだ足りない身長だった。

「啓介は黙つてて！」

やっぱり僕にはまだまだ不機嫌なご様子で。

「そついえば知ってるかい？ この地方の神様は、冬になると手軽な雪だるまを見つけてそこに宿るつて話」

おもむろにおかみさんが言い出したのは、昔からこの町に伝わる

伝説だった。

「知ってます！ 町で一番大きな雪だるまを作った人は、宿った神様が守り神になってその一番の願いを叶えてくれるって」

「お、なら美雪ちゃんは何かお願いしたのかい？」

「うん！ 啓介が立派なお医者になれますようにって」

耳を、疑った。

「お前……それで雪だるま作るうなんて言ったのか？ 俺の為に？」  
「……うん」

恥ずかしそうに、なんだか不貞腐れたように、美雪は頷いた。アホ、こつちが赤面しそうだったの。

「はは……全くお前ってヤツは……ははは……最高の女だよ」  
「なっ、ばかっ……」

恥ずかしがる美雪の顔が可愛すぎて、思わず抱き締めてしまいうになった。

「あらあら、もしかして感動の場面だったかしら？ これは失礼失礼。オバサンは奥に引っ込んでるから若い者同士お好きに続きをやっておくれ」

おかみさんの気をきかしてんだか嫌味なんだか、とにかく空気を読めないナイスな気遣いに、なんとかそれは踏み留まったけれど。

でも、これで心残りなく東京に行ける。

翌日の朝、僕は誰もいない駅で始発の電車を待っていた。見送りはしない。家族には家で別れを告げてきた。美雪には今日出発することは言っていない。ベタだけどアイツの顔を見ると決心が揺らぐ気がしたから。

六時十五分。電車が来るまでは、まだ五分程あった。ただ待っているのは暇だったので、プラットホームを軽く歩いてみた。

二日続けて積もった雪は、線路のところだけきれいに除雪され、ジャガイモづくりに欠かせない北海道特有の赤土が見えていた。駅からでも見える石狩山地も、どの山も厚い衣を纏い白く衣装換えしている。一番高く見える石狩山には美雪と二人でよく登った。先に行く美雪を追いかけて、僕はいつもへばってたっけ。

雪は、十勝平野の田も畑も町並みも、全てを白く染めて輝いている。まるでこの地を離れる僕を引きとめるかのように。

と、一人北海道への哀愁に浸っていると、突然携帯が鳴った。流れたのは桑田佳祐の『白い恋人達』。美雪からの着信音だ。

「もしもし？」

『もしもし？じゃない！ サヨナラもなしに消えようっていうの？』

電話の向こうからかなり怒った美雪の声がする。

「なんで分かった？」

『伯母さんに聞いた』

「またお袋かよ。せっかく格好良く旅立とうと思ったのに」

『勝手な自己満足狙ってんじゃないわよ！ 人として最低限の礼儀

でしょ!』

おっしやる通りで。

「わりいな、江戸っ子に礼儀作法って言葉はないんだ」

『まだ江戸っ子じゃないだろ!』

はあ、という美雪のため息が聞こえた。

『昨日の公園のほう見て』

線路をたどって見ると、近くに昨日行った公園が見えた。盆地にあるその場所は、プラットホームに立つ僕にも、その全景がはつきりと分かる。四台のブランコは、その上に積もった雪を乗せて、風に小さく揺らめいていた。滑り台の階段も、段一つ一つにちゃっかり雪を被っている。

『雪だるま、見える?』

「ああ」

公園の真中に鎮座する雪だるまは、一晩経ってもその大きさを変えていない。

東京に行ったら、もうあんな雪だるまを作れるくらいに雪は降らないのだろうか。

と、そんなことを思っていると、雪だるまが木の棒でできた手を振ったような気がした。

そんな馬鹿な、と目を凝らしてよく見てみると、雪だるまの後に人影があるのが分かった。

美雪だ。自慢の真っ白なコートに、長い黒髪がよく映える。携帯を持っていないほうの手で、せっせと地面の雪を掻き集めていると

ころだった。

『えいつ！』

思い切り振りかぶって、今作った雪玉をこちらに向かって投げた。

が、雪玉は小さな弧を描いただけで、公園の中でぽとりと落ちた。

「全然届いてねえぞ」

『ばか啓介！死んじゃ……』

最後の方は、同時にホームに入ってきた列車の音にかき消されて聞こえなかった。すごく酷いことを言われた気がする。

列車に乗って、もう一度受話器を耳に当てた時には、すでに電話は切れていた。何度掛け直してもつながらない。

ちよつと悪いことをしたかな、と思っただけで、美雪の声を聞いたときの心の動揺を考えると、やっぱりこれで良かったんだと思っ直した。

それでもすすきりしない僕の思いなどお構いなしに、車両の扉が音もなく閉じて、列車は動き出した。

ガタンガタン。

揺れる車内で美雪との思い出が一気に溢れ出す。いつも引つ張られて、迷惑ばかりかけられて、でも楽しかった幾つもの思い出。別に永遠の別れって訳じゃない。なのに寂しい気持ちがどんどん心を支配していく。

東京なんか行かない。美雪とずっと一緒にいる。そう言ってしまうえたら、どんなに楽だっただろう。一人の女より、町の未来を選んだなんて言えば、聞こえはいいだろうか。僕は男になりきれなかった、それだけのことも思える。

この時になって初めて、小さな後悔が僕の頭をよぎっていた。  
もう一度美雪の声が聞きたい。

つながらないと分かっていたながら、携帯のリダイヤルを押そうとした、その時、

「啓介！」

開いた窓の向こう側で、一番聞きたかった声が叫んでいた。ちょうど列車が公園の前を走っているところだった。

「美雪！」

窓から身を乗り出して僕も叫ぶ。そこで彼女は言ってくれた。

「行ってらっしゃい」

涙目のくせに、最高の笑顔で。

それは、誰のどんな言葉よりも僕の旅立ちを後押ししてくれる言葉だった。

だから僕もとびっきりの笑顔で返す。

「行って来ます」

いつの間にか降り出していた雪が、車内に入ってきては目に染み

た。  
あの日から五年。東京の大学で必死に勉強した僕は、極度のプレッシャーで押しつぶされそうな朝を迎えていた。

「ああ、……暑い！ ウルサイ！」

寝汗でじつとりとしたパジャマを脱ぎ捨てて、外でミンミンと鳴き続ける蝉に悪態をつく。

毎年二月か三月に行われる医師国家試験は、なんとかウィルスだかの影響で、予定日がずれにずれ込んで、夏場の今日まで開始が遅れていた。そんな重大な日を前に、僕は昨日から緊張で全く眠れていなかった。

ピンポン、ピンポン、ピンポン、ピンポン、ピンポン！

なんだか懐かしいインターホンの音を聞いたのは、試験用のスーツに着替え終え、ネクタイを締めている時だった。

「へい、へい」

小さな期待を胸にそつと玄関のドアを開ける。  
そこに立っていたのは、小包を手にした愛想の良さそうな青年だった。

「ちわつす！ 宅配便です」

なぜだか小さく落胆して、適当にサインをして小包みを受け取る。  
しかしふと見た差出人の名前が、再び僕の心を興奮させた。

『武藤美雪』

早る気持ちをなんとか押さえ、リビングに戻ってから机の上で白い包装紙を慎重に剥がす。

包まれていた箱を開けると、辺りにひんやりとした空気がたちこめた。

たくさんの保冷剤とともに入っていたのは、小さな雪だるまだった。

「啓介おっはー！」

元気してる？ 東京はなまら暑いっしょ？ こっちはもう夏だつて言うのになかなか涼しくて過ごしやすいよ。

いよいよ試験だね。あたしにはお医者のごとはよくわからないけど、ほら、やつぱ啓介の実力だけじゃ心配でしょ？ だからあたしからの暑中見舞いを送ります。

昔一緒に作ったでっかい雪だるま覚えてる？ あたしが啓介と最後に思い出作りたくて勢いで連れ出したのに、アンタは一生懸命作ってくれたよね。二人でやった雪玉転がしは本当に楽しかったよ。そういえば頭の方を作ってたあたしはダメダメで、啓介は笑ったけど、アレは本当に一生懸命やった結果なんだからね！

啓介が行っちゃってから、三日くらいたってからかな？ すっごく天気が良い日があつて、雪だるまが心配になつたあたしは例の公園に行つてみたんだ。そしたら案の定溶けだしてた。

そりゃあもう焦ったさ。やばいやばいって、残った雪掻き集めてそれでもやつと小さな雪だるまが作れるくらいしかなくてさ、あたしや涙ちよちよぎれたよ。

でもその小さな雪だるまだけは松屋のおかみさんに頼んで、冷やしとってもらったんだ。なんてたってあたしらの守り神だからね。

啓介がお盆なんかに帰ってきたとき見せたげようと思つてた。ま、結局あんたは一度も帰つてこないで今に至る訳だけだ。

でもおかみさんそれをずっと残しておいてくれたみたいでね、啓介が試験だつて聞いたから、送つてあげることになりました。小さいけどちゃんとできてるでしょ？

雪だるまはあたし達の守り神だもん。きっと成功しますようにってあたしが願かけしておいてあげたから間違いないよ！

啓介の夢はあたしのもあるんだから、叶えてもらわないと困るんだ。

この雪だるまが解ける前に、合格の知らせと一緒に持って帰ってくるんよ！それがずっと待つてる健気なあたしの我慢の限界。

やっぱり啓介がいないと寂しいわけですよ。引っぱり回すヤツがないとつまらないでしょ？ とつと合格して早く帰ってこんかい！ ってね。

月並みだけど北海道からあたしも応援してる。ガンバレ、啓介！

雪だるまと一緒に送られてきた美雪には似合わない少し長めの手紙。試験前の緊張やなんやらが一気に吹き飛んだ。

八月一日。

僕にとっては運命の夏に届いたなんとも粋な暑中見舞い。不器用な彼女が相当頑張って作ったであろう不格好な雪だるまは、手のひらサイズの本当に小さなものだったけれど、昔二人で作ったあの大きな雪だるまのような愛らしい顔をしていた。

五年間松屋の冷蔵庫で眠っていた彼は、窓から差し込む明るい日の光を浴びて、どこことなく誇らしげで、神々しくもあった。

すぐに解けてしまうのは目に見えていたけれど、何とかその前に合格して北海道に帰らなきゃ、なんて思わされる。

涼しい空気と熱いエールを運んでくれた雪だるまをそっと冷凍庫にしまい、緩んでいたネクタイをキュツと締めなおして、僕は意気揚揚と試験会場へと向かった。

暑中見舞いの雪だるま

あれほど鳴き叫んでいた蝉の音が止み、  
雲一つない夏空の向こう  
に、北の大地が見えるような気がした

( f i n )

(後書き)

ダメ出しし放題の作文を読んで下さった上に、こんなきな臭い後書きにまで足を運んでくれた読者さま、愛してます(殴  
自身初の長いお話でした。しかも恋愛(っというジャンルでいいんでしょうか？違ったら教えてください)に挑戦してみました。  
締切に追われる作家さんの気持ちがあったような気がします(結局間に合わなかったけど)

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3205b/>

---

暑中見舞いの雪だるま

2009年5月29日04時21分発行